
ソナチネ

雑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソナチネ

【Nコード】

N2033W

【作者名】

雛

【あらすじ】

俺はずっと祖父の家を訪れることを避けていた——そこに、彼女がいるから。

今はないサイトに掲載していたものを改稿しています。

前編

「いい加減、いい年齢なんだからさ、もうこういうバカなことはやめなよ」

「わかってるさっ……げほっげほっ」

父さんは、俺の言葉に激しく咳き込んだ。

……熱は39.2。もちろんこれは立派な風邪だ。しかも、どうやら肺炎を併発しているらしい。非常につらそうなのだが、その原因を聞けば同情する気は誰にもおきないだろう。

「……50に手が届こうっていう男が、真冬に日比谷公園の噴水で水遊びするのはどうかと思うよ。……いくら酔ってたってさ」

「……バカ野郎。記憶にないことを言うなっ……げほっ」

ほんとツラそうなんだけどね。

でも、やっぱり同情する気はおきないんだよ。

「良かったね、警察沙汰とかにならなくて……」

何しろ勤め先は、大手都市銀行。ほんのちょっとしたそういう醜聞がリストラネタになりかねない。

私的に非常に恨み骨髓の俺は、父さんの一番いやがることを言うてやる。

「……全然似てないと思ったけど、父さんも祖父ちゃんに似てるんだね、そういうとこ」

父さんは俺を怒鳴りつけようとして、激しく咳き込んでベッドに

倒れ臥す。俺はそつと布団をかけなおしてやると、病室の外に出た。

(……つたく、最後の最後に最悪の年末だよ……)

溜息を大きくつく。

「昌巳、どうしたの?」

ちょうど、戻ってきた母さんが、俺の顔を不思議そうに見ていた。

「何でもないよ。それより、父さん、ほんとに大丈夫なの?」

「ええ、大丈夫よ。肺炎もお薬で治るそうだし……ちょうど会社も冬休めでタイミングが良かったわね」

こういうのをタイミングが良いと言ってしまってもよいのかと俺は少しだけ首を傾げた。

「なら、いいんだけど……」

母さんからの電話で父さんが救急車で運ばれたのだと聞いたときには、一瞬、背筋が凍った。

大手都市銀行の人事課に務める父さんは、真面目なだけが取柄のような人だ。

昨今吹き荒れるリストラの嵐にいつ飲み込まれるのかと俺は密かに不安に思っていたりもする。今のところ幸い父さんはリストラさる方ではなく、する側の人間なのだけけど、でも、自分が真面目に仕事をすればするほど、他人の首を切るといふその結果に心を痛めていたことを俺は知っている。

それは俺の想像以上に父さんにとってはストレスだったらしい。

つい一昨日、父さんは忘年会……銀行とは一切関わりのない学生時代の友人達とのもの……に出席したそうだ。

ちょうど仕事納めの後ということもあってハメをはずしすぎた父さんは、同じくらい酔っぱらった同級生達とそのまま日比谷公園の噴水に飛び込んだのだという。（何てバカなことを）

そして、酔っ払い同士で水をかけあっているうちに足を滑らせて頭を打ち、そのまま動かなくなり、あわてた人々が救急車を呼んでくれたのだという。

幾ら酔っていたからとはいえ、俺にしてみれば、あの父さんが噴水に飛び込んだということが信じられない。しかも、真冬にその中で水かけっこをしていたなんて……たぶん、現場を直接見ても信じられないと思う。

何しろ、うちの父さんときたら、およそそういうことをする人物ではないからだ。

でも現実問題としてはそれが事実なわけで……俺は信じられないまでも、とりあえず結果の方はきちんと受け入れることにした。

病院での検査の結果、頭の方はただのコブだけということが判明したのだが風邪と共にひどい肺炎を併発していて、父さんはこの年末年始を病院で過ごすことが決定した。

……同時に、俺が年末年始を自宅で過ごせないということも決定した。

「それより、昌巳、ちゃんと準備はできているの？」

「できてるよ……」

俺はそつけなく言う。

突然の入院だった父さんは、空いている病室がなくて一人部屋。周辺の一人部屋の患者さんは皆、あまり症状が思わしくないのかひっそりと静まりかえっている。特に隣室の『佐伯』さんは、さつき

からお医者さんや看護婦さんがあわただしく出入りしている。

（……年末なのにな……）

せめて、新しい年を迎えられれば良いのにと、見ず知らずの人の病状の好転を願う。真っ青な顔色で俺とおなじ年頃の女の子が病室に入って行く姿が目に残った。

「持ち直すと良いのだけど……」

同じことを考えていたらしい母さんが溜息をつく。

「……悪いの？」

「……みたいなの」

母さんは顔を曇らせる。だが、それを振り切るように話題を変えた。ここは病院で、そういう人がいるのは仕方がないことだった。

「新幹線の切符はちゃんと持った？」

「うん。別にグリーンじゃなくても良かったのに」

「バカね、この時期、グリーンじゃなきゃ座れないわよ」

そうか、リターンラッシュだもんな。

「お土産も持ってくれた？」

「うん。ところで、何なの？この重いの」

俺は右手の紙袋を軽く持ち上げてみせる。

「虎屋の羊羹。お義父さんが大好きなのよ」

「ああ、祖父ちゃんの好物の栗蒸し羊羹？」

「そう。小倉のと合わせて全部で五本入ってるわ」

重いはずだよ……。羊羹は元々重いものだけど、数ある羊羹の中でも虎屋の羊羹ってのはとびつきり重い。羊羹の中の羊羹とも言っべき、とっておきだからだ。

俺はしみじみと溜息をつく。

「たいしたことないでしょ、男の子なんだから。……それともなに？ 静岡のおうちに行くのイヤなの？」

図星をつかれて俺はドキンとした。

「……イヤだよ」

だから去年の正月だって、GWだって、夏休みだって……法事だって何だって全部、部活で忙しいからって行かなかったんじゃないか。

「何で？ 翠ちゃん、会いたがってたわよ？ あんなに仲良かったくせに……それとも、照れくさいの？」

この間、法事でお祖父ちゃんちに行ってきたばかりの母さんはからかうような眼差しを向ける。

「……別に」

照れくさいわけじゃない。

「あんなに翠ちゃん、翠ちゃんって言ってたくせに」

何も知らない母さんはくすくすと笑う。

「そうだけど……」

「翠ちゃん、すごく美人になってたわよ。お母さんに似たのね。会ったらびつくりするわよ」

翠ちゃんが、美人なことなんてとっくに知ってるよ。

俺は心の中で呟く。

「……やっぱ、俺、うちで過ごしたいんだけど」

「ダメ。お義父さんも翠ちゃんも、あんたが行くのを楽しみにしてるんだから。だいたい、昌巳一人じゃあ、炊事も洗濯も出来ないでしょう？」

「そんなことないよ。寮で洗濯ぐらいしてるし……」

「あんた一人を家に置いておいたら、私が心配でお父さんの看病に専念できないの。おとなしく静岡に行きなさい」

母さんは病院の玄関を指差して言う。こういう風にはつきりきっぱり言われたら、俺が何を言っても絶対にダメ。

「……わかったよ」

俺は、今日何度目になるかわからない深い溜息をつき、病院を後にした。

□
□
□

普段は、新幹線の車内というのはわりと静かだ。

ただ、今日は年末のせいかどこかせわしないような気がした。

Uターンラッシュから少しはずれているとはいえそれでも故郷に帰る人たちは多いらしい。大きな荷物を持った人が何人もいたし、珍しく家族連れの姿も多い。

そんな中で俺の姿はちよつと違和感があつたかもしれない。

まあ、自分が思うほど、他人は自分を気にしていないものだけだ。

（翠ちゃん、か……）

俺は、記憶の中のその面影をなぞる。

翠ちゃんのフルネームは葛西翠という。

俺の姓も葛西で……つまり、血が繋がっている親族だ。年齢は、俺より一つ下。

高校1年の秋までは、我が家から徒歩10分のところにあつた祖父ちゃんちで暮らしていたけれど、祖父ちゃんが静岡に引っ越すのと同時に一緒に引っ越した。

書道家である祖父ちゃんは、その世界ではなかなかの有名人だ。時々、テレビなんかにも出ている。

去年は、教育テレビの趣味の書道とか何とかつていう番組の講師も勤めていた。

今は、書を書くだけでは飽き足らず、自分の工房を構えてそこで紙漉きもしているのだ。ついでに、最近は陶芸にも手を出しているんだとこの間のメールで自慢してたな。

PCも携帯メールも使いこなし、さらには自分のホームページまで持っている祖父ちゃんは、根っから芸術家気質の人だ。うちの父さんと血が繋がっているのが信じられないほどに頭が柔らかく、

性格もぶつとんでいる。

（しかも、この年齢でまだ現役だし……）

一昨年だか去年だかは何とかつていう女優との写真が女性週刊誌にすっぱ抜かれていたし……。還暦なんかとづくに過ぎて、喜寿だつて過ぎていくせに、不思議と女性によくモテる。まあ今は独身だから、別にスキャンダルじゃあないんだけど……。

（でも、翠ちゃんはいいい気はしないだろうな……）

父さんは頭つから湯気出して激怒してたつて言うからな。

うちの父さんのお母さん……つまり、俺のお祖母ちゃんが亡くなつた後、祖父ちゃんは4回結婚して、3回離婚して1回死別した。その最後の奥さんが、翠ちゃんのお母さんだ。

呉服屋さんの店員をしていたところを祖父ちゃんに見初められたというその人は、本当に綺麗な人だった。俺もよく覚えているけど、和服の似合う日本美人だった。

俺は、お祖母ちゃんと呼ぶわけにはいかず、いつも翠ちゃんのお母さんと呼んでいたけれど、実際、翠ちゃんのお母さんはうちの母親よりも若かった。

翠ちゃんは、その人と祖父ちゃんの子供で……父さんの年齢の離れた異母妹……つまり俺にとっては年下の叔母に当たる。

でも、俺はそんなこと全然知らなかった。

翠ちゃんのお母さんは身体が弱かったから、翠ちゃんは近所の俺んちに預けられることが多くて、俺たちはまるで兄妹同然に育った。俺が以前からの志望校であるサッカーの強豪である東慶に合格し、その寮に入る時、翠ちゃんは淋しいと泣いた。東慶は中高一貫の私立で、有名私立大学への進学率も高かったから、うちの親は反対し

なかった。

俺は、サッカーをやる為に自分で選んだことだったけれど、寮に入ってからこっそり泣いた。なんでサッカー部は寮なんだろうと口惜しくも思った。

翌年、翠ちゃんが東慶に入学した時、俺は自分が合格したときよりも嬉しかった。

東慶は男女別学だったけれど、それでも、その姿を時々は目にすることが出来た。

それに、時々、翠ちゃんの弾くピアノの音が聞こえていたから、俺には翠ちゃんが近くにいることをはつきりと感じられたのだ。

祖父ちゃんが静岡に引っ越すことになって翠ちゃんが東慶を辞めてついていった時、俺の世界は一変した。

誰の目にも俺の変化がわからなかったとしても、俺の中ではこっそりと何かが抜け落ちた。

それに気付いたのは、親友の誠二だけだっただろう。

たぶんあの時が俺の幼年期の……あるいは、少年時代の終わりだった。

俺も翠ちゃんもあの時まで、自分達がどういう関係なのか、はっきりとよくわかっていなかった。

翠ちゃんは祖父ちゃんのことを『じじ』と呼んでいたし、祖父ちゃんと翠ちゃんのお母さんが結婚したのは、俺が小学校にあがった年だったからだ。

……俺の初恋は、翠ちゃんだった。

おっとりとしているくせに芯は強くて、目を離すと何をするかわからない翠ちゃんを、俺はずっと好きだった。

後編

「……昌巳くん」

改札を出るなり、名を呼ばれて俺の心臓ははねあがった。

「……翠ちゃん」

そこにいたのは、まぎれもなく翠ちゃんだった。

肩につくくらいで切りそろえた髪、抜けるように白い肌、ほっそりとした輪郭……俺の記憶にあるよりもずっとずっと綺麗になった翠ちゃんがそこにいた。

「久し振り」

翠ちゃんは嬉しそうに笑顔を浮かべる。

淡い水色のダッフルコートがよく似合っていた。

「……うん、久し振り」

俺も笑顔を浮かべた。

（……会いたくなかった……）

少しぎこちなかったかもしれないけど、でも思っていたよりはずっとうまく笑えた。

「わざわざ迎えに来なくても良かったのに……」

(……でも、ずっと会いたかった……)

「でも昌巳くん、今の家、まだ2回目でしょ。父も心配してたし……」

私も心配だったからと翠ちゃんは柔らかに笑った。

祖父ちゃんには悪いけど、でも、今この瞬間でさえ、俺の中には祖父ちゃんのことなんかほとんどなかった。

ただ、目の前の翠ちゃんの姿だけを、目が、追う。

「ちち？」

そして、耳慣れない単語を聞き返した。

「……ああ、パパのこと。『父』って呼ぶようにしてるの」「祖父ちゃんのことを？」

俺たちが今のように離れてしまう以前、翠ちゃんは祖父ちゃんのことを『パパ』と呼ぶようになっていたはずだ。

「うん。最初は『パパ』って呼んでいたんだけど、一度、援助交際と間違えられたことがあってね……それ以来……」

何とも言えぬ表情で翠ちゃんは溜息をつく。

「……そうなんだ」

「ご愁傷様と付け加えた。それ以上、何と言っていいものかわからない。」

「父が悪いんだよ。もういい年齢のくせに、いろいろ噂を振りまくからさ」

むうっと唇を尖らせる。

「……うちの父さんも激怒してたけどさ」

「私だつて怒ったよ。だって、あの日、私の誕生日だったんだよ。それをすっぱかして美人女優とデートなんだから……あの日、おめでとつて言ってくれたの昌巳くんだけなんだから」

「……俺だけ？」

「そつ。昌巳くんのメールだけ」

「なんで？友達とか知らないの？」

「ううん。みんな、私が2月28日生まれだと思ってるの。だから、前の日にプレゼントとかおめでとうメールとかいっぱいもらったんだけどね」

「……ふん」

翠ちゃんは閏年の2月29日生まれ。4年に1回しか誕生日が来なくて不公平だと小さな頃に泣いたことがある。4年に1度じゃ都合が悪いから、お祝いはいつも28日にするのが決まりだった。

でも、「お誕生日おめでとう」は1日の0時に言うのが、祖父ちゃんの作った翠ちゃんルールなのだ。

「昌巳くんのメールは、0時ちょうどに着いたの。28日と1日の間にね。だから、本当の誕生日におめでとつてくれたのは、昌巳くんだけ。父は美人女優とデートで忘れてたつてわけ……まったく、父親の風上にも置けないんだから」

翠ちゃんは呆れたような口調で淡々と言葉を継ぐ。祖父ちゃんはさぞやりこめられたに違いない。暴発はしないし、癇癪を起こした

りもしないし、感情的にもならない代わりに、翠ちゃんが怒るときはとっても怖いのだ。

バスを降りるとおぼろげに見たことのある場所に着く。

どこか、懐かしいと感じさせるこの風景は、たぶん、日本人が心の中に持つ原風景の一つなのだと祖父ちゃんが言ったことがある。その時は何のことかよくわからなかったけれど、今ならば何となくわかる。

俺はここで生まれ育ったわけじゃないけど、きつと『故郷』と言われたら、この風景を思い出すだろう。

「あ、お米屋さんに寄ってくれろ？」

翠ちゃんに歩調を合わせながら、祖父ちゃんの工房への道を辿る。祖父ちゃんの工房は、昔のどこかの豪農の家を移築したという築百年になるという建物で敷地も広い。高い建物がほとんどないせいか、ここからその屋根が見える。

「いいけど、お米買うの？」

「うん、餅米。せっかく昌巳くんが来るんだからお餅つきしようって、父が言い出して……もう、注文はしてあるの。本当はお弟子さんが取りに来るって言ってただけど、大掃除で忙しそうだから私が行くって言ったの。ちょうど昌巳くんが来るから迎えに行くつもりだったし……」

「餅つき？」

「うん。昌巳くん来るのを待ってたんだよ」

昔ながらの商店街の中の一軒に翠ちゃんは入っていく。

店番の女の子と一言二言言葉を交わした翠ちゃんは、手ぶらのまま出てきた。

「餅米は？」

「父が自分で取りに来たって」

「祖父ちゃんか？」

「……うん。張り切りすぎて、ぎっくり腰とかにならなければいいんだけど……」

ふうつと小さく溜息をつく。

確かにその恐れは多分にあるな。

「……翠ちゃん、高校は地元の高校に行ってるんだっけ？」

さりげない口調で翠ちゃんの近況を尋ねた。

俺はずっと翠ちゃんのことを聞かないようにしていたので、あまり知らないのだ。

「うん。普通の公立高校。東慶みたいに部活とかも強いところないの。県大会ならイイ線いくんだけど……あ、でも、ちよつと自慢できることあったな」

「何？」

「来年、Jリーガーが二人も出るんだ。……地元だけど」

「磐田？」

ここの地元のサッカーチームなら、磐田のはずだ。

「うん。山丘先輩と小野田先輩って言うの。元々、ユースでやってたっていう人達なんだけど……知ってる？」

「……名前だけは聞いたことがあるかも」

「せーじくんから？」

翠ちゃんが軽く首を傾げる。

「うん。……よく覚えてたね、誠二のことなんか」

「忘れようだったって忘れられないよ。強烈だったもん」

翠ちゃんは一度だけ、俺の親友である神原誠二に会ったことがある。中等部の時に、誠二が我が家に遊びに来たことがあって、ちょうど翠ちゃんも来ていたのだ。それに、学校でも何度も姿を見かけたり、噂を聞いたりしたことがあっただろう。

「……確かにね」

誠二の個性は、ありとあらゆる意味で強烈だ。あの時も確か何かやらかしたはずだ。

「今でも同室なの？」

「……クサレ縁だね」

俺は溜息をつく。どういうわけか俺は、周囲から誠二のお守役だとみなされているのだ。

「年とつたら、父みたいな老人になりそうだよね、せーじくんは」
「……最悪」

俺のその時の表情に、翠ちゃんはおかしそうにくすくすと笑った。その笑みに、どきりと心臓が大きく鳴る。

俺は、唇を噛んだ。

どうしようもなくやりきれない気持ちで胸を満たす。

「……昌巳くん？」

翠ちゃんが不思議そうな表情で俺の顔をのぞき込む。

「何でもない……」

俺は笑顔を浮かべて見せた。

そうしないと、泣き出してしまいそうな気分だったからだ。

□
□
□

「万事予想通りって言うか何て言うか、まったく期待を裏切らないよね、うちの父は……」

ピアノの椅子に座った翠ちゃんは深々と溜息をつく。

翠ちゃんのピアノは、国産の手作りのピアノだ。何事にも凝り性の気のある祖父ちゃんが、翠ちゃんにピアノを買い与える時に翠ちゃんを連れてさんざん楽器店を回った結果、翠ちゃんが気に入ったのがこのピアノだった。メーカー品の俺のピアノと違って、どこか不思議な音色を響かせる。

「……そうだね」

俺たちが恐れていた通り、はりきり過ぎた祖父ちゃんはしつかりぎっくり腰になった。

往診のお医者さんからは年寄りの冷や水だとさんざんからかわれた。祖父ちゃんは奥でうんうん唸ってるけど、翠ちゃんはしらんぷりだ。

まあ、あれだけやめろって言われてて、このザマだから翠ちゃんが呆れるのもわかるけど。

「大丈夫かな？」

「お弟子さんがついてるから、大丈夫でしょ」

この家には離れに住んでいる住み込みのお弟子さんが2人と、あと運転手の旦那さんと一緒に別棟に住み込んでいる家政婦さんがいる。看病の人手は充分に足りているだろう。祖父ちゃんは、「翠が足りない」って絶対に言っているだろうけど。

「こつちに、随分、馴染んでるんだね」

往診のお医者さんもそうだったけど、さっきお裾分けだと言ってお餅を届けに行った隣近所の家も、みんな翠ちゃんのことを知っていた。まるで自分の娘か孫のように翠ちゃんに接していて、俺は随分と驚いた。うちの方は古い住宅地だからわりとご近所づきあいをしている地域だと思うけど、でもこの方がやっぱり、濃いというか濃密な感じがする。

「父の地元だもん。さっきのお医者さんは、父の親友の息子さんだよ。……知らなかった？」

「……うん」

初耳だった。あんまり祖父ちゃんと馬の合わない父さんは、祖父ちゃんのことをあまり話さないからな……。

あそこの……と翠ちゃんは周囲とはちょっと不釣り合いな洋風デコレーションの家を指差す。

「あの家が建ってたところに、去年まで、おばあさんがやっていた

駄菓子屋さんがあつたんだ。そのおばあさんがお祖父ちゃんの初恋の人だつたんだって」

「へえ……」

「その人の名前が『翠』なの。だから父は、私の名前を『翠』ってつけたんだって」

翠ちゃんは、穏やかに微笑んだ。

俺は、こういう翠ちゃんの表情がすごく好きだった。

見ているだけで、自分の気持ちが穏やかになるから。

「好きで好きでしようがなかったけど、でも、結婚できなかったんだって」

「……なんで？」

「身分違い。お祖父ちゃんは商家の三男坊で、その人のおうちは元士族だつたんだって」

「身分違いって……」

今時、それはないだろうと思った。でも、祖父ちゃんが若かった頃を考えたら、案外そういうのがあつたのかもしれない。このあたりは田舎だし、古い因習とかが未だに残っていそうだから。

「駄菓子屋さんに行くだけなのに、いそいそ着替える父を見ていっそ感心したよ」

「さすが祖父ちゃん……」

「でしょ。そのおばあさんもすごく品の良い人でね……優しい人だった。よくオマケしてもらったんだ。駅前のコンビニのお菓子とかよりずっと好きだつたんだけど、引っ越してきて半年くらいしてかな……駄菓子屋さんを畳んで東京の息子さんのところに行っちゃったの。あの時の父は、しょんぼりしてて見てられなかったよ」

「祖父ちゃん、求婚とかすればよかったのに」

「ママに求婚する時に、『おまえが最後の妻だ』って約束したんだって。ヘンなとこ律儀なんだから……」

笑いながら、でも、翠ちゃんは嬉しそうだった。

「……それに、初恋の人は特別なんだって」

祖父ちゃんの初恋か……想像もつかないな。

「……初恋の人は、特別……か……」

俺はぼつりと呟く。

翠ちゃんの肩が小さく震えた。

「『特別』、だよ」

消え入りそうに小さな小さな声。

「……俺も、『特別』だよ」

顔を伏せた翠ちゃんのその横顔を見つめる。

「ずっと、『特別』だよ」

俺はもう一度言った。

翠ちゃんが、きゅつと唇を噛み締めた。

俺も唇を噛み締める。

何かが溢れ出しそうで、それを堪えるのがひどく難しかった。

「……何か、弾こうか？」

翠ちゃんは、何かを振り切るようにして顔をあげる。

そのまっすぐな眼差しに、俺は感謝すら覚える。

そして同時にそれは、感傷的な……哀しみにも似た感情を呼び覚ました。

「……ソナチネ」

胸の中で渦巻く嵐を呑み込むようにして、そのタイトルを口にす
る。

「うん」

翠ちゃんはゆっくりとピアノの蓋を開けた。鍵盤はピカピカに磨かれていて、翠ちゃんが今でも大切に弾いていることがよくわかった。

目を閉じて手をポジションに置く。サッカー一本にしばったとはいえ、今でも趣味では弾く。それに、一緒に何度も何度も練習を繰り返した曲だったから、楽譜はいらなかった。今でも楽譜なしで弾ける自信がある。

繊細な音色が、そっと溢れ出す。

（……好きだよ……）

口にするこのできなくなった想いが、胸の中に淀む。

そして、決してそれを言葉にしない為に、俺はラヴェルらしい儚さと物哀しさに満ちた空気の中で深く息を吸った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2033w/>

ソナチネ

2011年8月28日11時40分発行